



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

理事長に就任して

理事長 矢島 弘 嗣

目 次

- 理事長に就任して
- 理事長の任を終えて
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 名誉・特別会員のご挨拶
- 物故会員への追悼文(田村清先生)
- 物故会員への追悼文(Steichen先生)
- 平成26年度 各種委員会委員
- 監事紹介
- 教育研修会のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

この度、平成26年4月16日に開催されました定時総会におきまして理事に選任され、直後の臨時理事会で第7代理事長に選出されました市立奈良病院四肢外傷センターの矢島でございます。浅学菲才の身でこのような大任を担うことになり、身の引き締まる思いを超えてことの重大さを痛感しておりますが、粉骨碎身の覚悟で日本手外科学会の発展のために尽くす所存ですので、会員の先生方にはご協力とご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、今回の理事選出におきましては、初めて選挙が行われました。選挙によって理事が選ばれることは非常に素晴らしいことであり、今後いろいろな代議員の先生方がそれぞれの思いや抱負をもって立候補し、一般の代議員の先生方は同じような考えを持つ候補者に投票し、理事会の目指す方向を定時総会において決定すべきと思っています。ただし、今回初めて選挙が行われたこともあって、いくつかの問題点も浮き彫りにされました。その1つは委任状の扱いであり、また最も問題と思われたのは中四国、九州地区の理事が1人も選出されなかったことであると考えております。これらの問題点を改善すべく、定款等検討委員会で早急に役員選挙の細則の検討を行っていただき、できれば2年後の選挙においては、より多くの先生方から理解されるような方法で施行したいと考えております。

選挙のことよりも重要な課題はやはり「専門医」の問題でしょう。三浪、佐々木歴代理事長が目指したいわゆるsubspecialtyの専門医は、落合前理事長の時にようやく社団法人日本専門医制評価・認定機構に認められました。社団法人日本専門医制評価・認定機構は今年の5月8日の社員総会で解散が決議され、一般社団法人日本専門医機構に事業内容が引き継がれました。これに伴い本学会

は、「専門医制度整備指針2014」に沿うような形で専門医制度、研修プログラムの変更を行わなければなりません。それを新機構の専門研修プログラム評価・認定部門ならびに専門医認定・更新部門に認められて、初めて確固たるsubspecialtyの専門医になるわけです。簡単に言えば、今は仮免許の状態であり、日本手外科学会会員が一丸となって正式な免許を手に入れなければならないわけです。これを遂行するにあたり、いろいろな意見もあると予想されます。またかなり無理なことを会員の先生方をお願いしなければならないかもしれません。

しかしながら、これまでの理事長をはじめとする役員の方々、そして専門医に関係する委員会の委員の方々の努力を無にするわけにはまいりません。確固たる「手外科専門医」の獲得のため、粉骨碎身の覚悟で臨むつもりですので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

理事長の任を終えて

前理事長 落合直之

2年間理事長の任に当たってきましたが、瞬く間に過ぎた思いであります。今期の理事会では、本学会が代議員制度に移行した実質的に最初の総会で選出された役員メンバーと、日本整形外科学会・日本形成外科学会の基盤領域の上に成立している手外科専門医領域を確立すべく努力して参りました。しかしながら、1年目の昨年 の 定時総会 は 荒れに 荒れました。そして、2年目が終わり次期理事会へ引き継ぐべき去る4月に沖縄で行われた最後の定時総会も19名の理事立候補者が乱立する事態となり日本手外科学会の長い歴史にあって恐らく永久に記憶される定時総会となりました。しかしながら、言い古されたことわざですが「雨降って地固まる」の例え通りこのような変革の混乱時期を経て盤石な法人そして専門医制度が確立できるものと私は確信しております。

理事長就任時のご挨拶に取上げました法人化後の基盤を盤石なものにし事務局機能を確立することに関しては、広報・渉外委員会や事務局のご尽力で、今期は、日手会ニュース発行・理事会活動の報告などかなり迅速に行えたと思います。財政面の改革も、効率的な理事会運営に努め、委員会活動には積極的にWeb会議を導入するなどかなり改善いたしました。しかしながら、世の中のIT化の流れ、それも専門医制度導入に伴う専門医の受験・更新に関わる会員管理用のシステム構築その後の維持・管理に今後学会はかなりの財政的負担を強いられることが予想されます。そこで、オンラインジャーナルを導入する中で、その運用の利便性を追求する、すなわち広告収入を得ることで財政的にも学会にメリットのあるものにする方向性を今期の理事会で先鞭を付けることができました。

今期の理事会の最大課題は、2015年以降導入される新専門医制度への筋道をつける事と言うことも就任時に書きました。この点に関しては、これまでの先人の努力が実り、2013年7月から向こう3年間日本専門医制評価・認定機構から手外科専門医制度は、正式にsubspecialtyの専門医制度として認定されましたので、一つ大きな壁をクリアーできました。次期理事会には、平成26年5月に発足した一般社団法人日本専門医機構に手外科専門医制度の実績を示し広告可能な専門医制度の確立へと活動して行っていただきたいと思います。

なお、日本の専門医制度の中核となる中立的第3者機関としての日本専門医機構の設立が、我々理事会の任期終了後になったこともあり具体的な専門医研修プログラム、カリキュラムなどの枠組みを構築するところまでは行きませんでした。しかしながらsubspecialtyの専門医研修は2021年に開始される予定です。それを念頭に置き、次期理事会メンバーの若返りを図ることができましたので、今後の活動を期待したいと思います。

末筆ではありますが、2年間のご支援誠にありがとうございました。会員の方々ならびに理事会のメンバー、そしてお忙しい日々を夜遅くまで頑張っておられた事務局の方々はこの場をお借りして御礼申し上げますとともに、今後の日本手外科学会の益々のご発展を祈念致します。

副理事長に就任して

副理事長 鈴木茂彦
(専門医資格認定委員会担当)

この度、副理事長に就任いたしました。2年前の理事就任時に、経歴を詳しく記載させていただきましたので、ここでは割愛いたします。

今期の理事会にはいろいろな課題がありますが、最大の課題は、今春設立された一般社団法人日本専門医機構による新しい専門医制度へのスムーズな移行への地ならしではないかと思えます。認定施設の見直しや組み換えなど多くの作業が待っています。一方では従来の専門医制度の移行期間が終わり、当面は規則に沿った認定、更新作業を淡々と進める必要があります。私は専門医資格認定委員会担当理事として、運用は柔軟に、かつ原則を外さないという立場から見守っていきたいと思っています。

一方、学会として一番大切な目的は専門医の育成ではなく、学問、サイエンスとしての手外科学を発展させることで、医療としての手外科を充実させることにあると思えます。学会ホームページトップには「日本手外科学会は、1957年(昭和32年)に創設され、現在では約3,400名の会員が、人間の体の中で最も緻密で最も鋭敏な感覚を持つ“手”についての研究を進めております。」と記載されており、研究することが旗印に挙げられています。そういう意味で、専門医認定が学会と離れた組織に移行し、学会は研究にウエートを戻すことが自然な流れだと考えています。

私が若い頃、手を含む全身熱傷の患者の瘢痕拘縮形成手術をコツコツと行っていた時、麻酔科の教授が近づいてきて、「先生大変ですね。このお仕事をサイエンスにすることは難しいですね」と同情交じりにおっしゃいました。私が目覚めて発奮したのはここからです。皮弁の生死をカンに頼らず客観的に診断する方法や皮弁の生着を確実にするdelayメカニズムの解明と薬物による壊死救済法の開発、虚血再灌流障害の解明と予防等の基礎研究を行うとともに、瘢痕拘縮形成手術に有用な局所皮弁を体系化しました。さらに真皮の再生研究に取り組みました。同じ頃、整形外科の日手会会員の先生方によって関節軟骨の再生研究が進められました。わが国で実用化されている代表的な再生医療が皮膚と軟骨であることは、手外科医の誇りだと思えます。

今後、手と上肢の解剖学と生理学のさらなる研究を推進しなければならないと思えます。今さらと思っておられる方が多いと思えますが、解明されていないことがまだまだあります。これらの追求を進め、新たな治療方法を見出すという、臨床に直結した学問としての手外科学の研究を推進し、その発展に寄与できることが、副理事長としての願いです。

日本整形外科学会と日本形成外科学会の土台に乗った本学会が、独自の発展を遂げ、国民から広く認知された学会になりますよう、矢島弘嗣理事長の補佐役として力を注ぎたいと存じますのでよろしく願い申し上げます。



副理事長 三上容司
(財務委員会、Web登録委員会担当)

この度、平成26年4月16日に開催されました「一般社団法人 日本手外科学会」定時総会において理事に選出され、同日開催された臨時理事会にて副理事長を拝命いたしました三上容司です。思いがけないご指名でありましたが、微力ながら本学会のためにお役にたてるのであればとの思いでお引き受けした次第であります。今更のように、その重責に身の引き締まる思いですが、矢島弘嗣新理事長の強力なリーダーシップのもと、会員の皆様のご協力を得て、日手会の発展に尽力したいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、日手会が一般社団法人に移行してまる4年が経過しました。振り返りますと、平成22年に一般社団法人に移行した際、当時の佐々木孝理理事長が掲げられた目標は、1. 健全な財務運営、2. 広告のできる専門医を目指す、3. 日本医学会加盟、4. 標榜科としての手外科を目指す、5. 研修単位登録システムの再構築、6. web会議の導入、7. 症例登録への筋道の策定でした。これらの中のいくつかはすでに実現されました。平成23年には日本医学会に加盟できましたし、研修単位登録も本人管理から学会管理へと変わりました。Web会議も広く行われるようになりました。しかし、その一方で、道半ばの課題も残っています。財務委員会の創設により財政規律の保持が図られましたが、支出増大の圧力は強く、今後それにみあう収入の増加にむけての仕掛けが必要です。落合直之前理事長時代の平成25年6月には、社団法人日本専門医制評価・認定機構により整形外科と形成外科を基盤とする2階建て部分のsubspecialtyとしての手外科専門医制度が認められましたが、その後、第三者機関である一般社団法人日本専門医機構への移行という制度変革が起こり、これに対する迅速な対応を迫られています。基盤学会である日本整形外科学会と日本形成外科学会と協議しつつ日手会固有の専門医制度を維持・発展させていく必要があります。また、日手会ではジャーナルのオンライン化をはじめとして、種々の事業がIT化されつつあります。しかし、ややもすれば統一性や互換性に欠けるきらいがありますので、この点に十分留意してIT化を推進していく必要があります。

種々の課題がありますが、いずれも従前にも増してスピーディーな対応を求められています。矢島理事長を補佐しつつ、理事、監事、会員の皆様のご協力を得て、これらの課題の解決に向けて取り組んでいく所存です。今後とも、温かいご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

理事に就任して

池上博泰

(社会保険等委員会、情報システム委員会担当)

2014年4月に開催された定時総会において、一般社団法人日本手外科学会理事に選出していただき、ありがとうございました。大変光栄に思うと同時に、責任の重大さを痛感しております。もとより微力ではありますが、少しでも会員の皆様のお役に立てるよう全力を尽くす所存ですので、何卒よろしく願いいたします。

私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに同大学整形外科に入局いたしました。卒業3年目の平塚市民院出向中に石黒先生のご指導のもと手外科に興味を持ち、慶應義塾大学手の外科グループに加えていただきました。ニワトリの腱を使用した基礎研究をはじめ、多くの先輩、同僚、後輩に支えられてきました。1994年からはボストンのMassachusetts General Hospitalに留学させていただき、1997年からは慶應義塾大学病院で勤務してきました。2012年4月に慶應義塾大学から東邦大学に異動し、現在、東邦大学医学部整形外科学講座(大橋)に勤務しております。

今回、本学会理事として情報システム委員会担当と社会保険等委員会担当を拝命しました。学会の将来を担う情報システムの構築は、コストパフォーマンスも含めてとても重要です。今までの経緯、将来性、日本整形外科学会・日本形成外科学会との連携を考慮して活動していきたいと思っています。また手外科分野の診療報酬点数は脊椎外科などと比べると、その技術がまだ十分には評価されていないので、社会保険等委員会を通じて改善していきたいと思っています。幸いにも私は、日本整形外科学会の情報管理システム委員会委員、社会保険等委員会であり、また東京都社会保険診療報酬請求書審査委員会審査委員でもあります。日本整形外科学会、日本形成外科学会とともに協調して、日本手外科学会のために、積極的に活動していきたいと考えています。会員の皆様におかれましては、何かお気づきの点や要望などがありましたら、学会事務局にご連絡いただけたらと思います。

本学会は会員数も増え、法人化や専門医制度の開始により、さらに充実してますます発展するかと思っております。そのような中で、特に若い会員にとって魅力ある学会になるよう努力することが私の責務かと考えております。理事長の矢島先生を支え、明るい未来のある学会を目指して参りたいと存じますので、会員皆様の温かいご理解とご支援をお願いいたします。



稲垣克記

(機能評価委員会、専門医制度委員会担当)

日本医学会の分科会である日本整形外科学会と日本形成外科学会のsubspecialtyの認定のもと一般社団法人日本手外科学会は新しく専門医制度が誕生しました。これは諸先輩、役員の方々が時間をかけ忍耐強く築き上げてきた素晴らしい制度であります。私たちはこれを遵守するとともに整形外科医と形成外科医がお互いに理解し合い協力しあって進むべきであると思います。本学会専門医制度の維持と発展のため、ひとつひとつ解決すべき点を乗り越え日手会の社会的地位を大きく前進していかなければいけません。

私は昭和59年卒業の整形外科医師で本学会に入会してから25年が経ち、本学会の目覚ましい発展を感じて育ちました。大学院生の頃は東京大学整形外科神経診に2年間当時の長野 昭先生と都立広尾病院 原 徹也部長の末梢神経診グループのもと腕神経叢麻痺の診断、治療に関する教育を受けて育ちました。その後、昭和大学医学部整形外科では藤巻悦夫教授に手の外科と肘関節外科に関する研鑽を積み、平成9年から2年間米国Mayo Clinicに留学し手外科ではRonald L. Linscheid先生、Richard A. Berger先生、William P. Cooney先生、肘関節外科ではBernard F. Morrey先生、Shawn W. O'Driscoll先生の薫陶を受けました。また、An教授から上肢のBiomechanicsを中心に多くのトランスレーショナルリサーチを行ないました。

私は現在日本肘関節学会と日本整形外科スポーツ医学会の理事も拝命しており、これらの学会との迅速な情報伝達と整合性の確立が可能です。さらには教室を主催する整形外科医師として本学会の母体法人である公益社団法人日本整形外科学会とのパイプ役を担う事も可能です。現在手・肘関節外科に関する多くの国際学会に参加しcommittee memberやactive memberとして仕事をさせて頂いております。平成26年度は機能評価委員会と専門医制度委員会の担当理事を仰せつかりました。

今後は矢島弘嗣理事長新体制のもと、さらにこれらの国際学会に参加し現在の専門医制度を守りつつ本学会の発展のために尽力したいと考えます。

どうぞ宜しくお願いいたします。

.....

岩崎倫政

(カリキュラム委員会担当)

この度、伝統ある日本手外科学会(以下、日手会)の理事を拝命いたしました。このような大役を仰せつかり身の引き締まる思いですが、与えられた使命を全うすべく、全力を尽くす所存でございます。

私は、4月に行われた理事選挙前の所信表明演説で述べさせていただいたように、1)大学の教室主任教授、2)東北・北海道地区に属する代議員、3)若い世代に属する代議員、の3つの立場を基盤として理事としての職務を全うしていきたいと考えております。

現在、日手会は大きな難題に直面しています。その一つが、間もなく開始される新専門医制度に

どのように対応していくかという点であります。この制度に対し適切な対応がなされなければ、整形外科ならびに形成外科における subspecialty 領域としての手外科の地位低下と若手学会員の激減という事態を招くことが十分に予想されます。第二に、学会に対しより厳しくなるであろう周囲からの要求に、如何に対応していくかという点があります。現在、大学(当然、医学研究科や大学病院も含め)は、各方面よりグローバル化やイノベーションをキーワードとしたダイナミックな組織改革や研究成果の向上を要求されています。そして、これらの要求は、国際的競争に打ち勝てる革新的研究成果を上げることに集約されます。今後は、学会に対しても同様の要求がなされることは確実であります。したがって、日手会はさらに国際化を進める一方で、学会主導の革新的研究成果を上げ国際的地位を向上していく必要があります。

私は学会の最も重要な役割の一つは、バランスの役割を担っていることだと考えています。手外科領域のなかで現行の治療法等が行き詰っている疾患に対しては、学会主導で再生医療等の新規治療法の開発研究を促進させる。一方で、基礎的データやエビデンスに乏しく、倫理問題を内在するような診断・治療法の臨床応用に関しては、学会としてより慎重な対応を促していくことが求められます。そして、このような機能を果たしていくことが、本学会の地位向上に繋がると考えます。

最後になりますが、指名された各種委員会の担当理事としての職務は果たしつつ、甚だ微力ではございますが上述した問題点の解決に向けて誠心誠意努力していく所存でございます。日手会会員の皆様には、これからもご指導、ご協力を仰ぐ機会が数多くあると存じます。今後とも、これまで以上に、何卒よろしくお願い申し上げます。これをもちまして理事就任のご挨拶に代えさせていただきます。

.....

柏 克彦

(教育研修委員会、先天異常委員会担当)

この度、会員諸兄のご高配を賜り、日本手外科学会理事を拝命致しました。誠に名誉な事と改めて厚く御礼申し上げますと共に、責任の重大さに身の引締まる思いであります。

私は、Microsurgery、皮弁・再建外科領域を中心に形成外科医として診療・研究に従事してまいりましたが、その過程で四肢の外傷や先天異常に接し、本学会諸先輩方の高度かつ先進的な知識・技術を学びたいとの考えから、形成外科専門医取得後に入会させて頂きました。本学会は、「手・上肢疾患に関わる最新の医療情報・サービスの提供と地域貢献、社会利益の増進」を目的として、整形外科の先生方を中心に1957年に設立された歴史ある学会と認識しておりますが、形成外科医の立場から見ましても、熱傷、先天異常、外傷、腫瘍、瘢痕拘縮、難治性潰瘍など殆どの診療領域が四肢をその範疇に含んでおり、習得すべき事の多い分野であります。一方で、教育・診療環境の相違から、高度にspecializeされた本学会への参加を数居が高いと捉える向きが形成外科医の一部にあることも事実の様に思います。一般社団法人日本専門医機構によって手外科専門医制度が整形外科と形成外科両者のSubspecialtyに位置付けられる事は、本学会にとりまして解決すべき問題を孕

んではあるものの、我々が手外科の重要性を再認識する機会としてむしろ有難く感じております。そして、形成外科という立場もまた、Microsurgeryや皮弁外科、創傷治癒などの領域を中心に本学会に貢献すべき資質を有している様に思います。本学会のより一層の発展のため、診療科の垣根を越えた交流と情報交換、より多くの後進の参画が一助となることは言うまでもありませんし、形成外科において手外科への理解が深まることにより、手外科Specialistの活躍の場が広がるのが理想的と考えます。

本年度の定時総会での落合前理事長のお話しにもございましたが、本学会の将来に向け、質を担保した専門医育成システムの確立、研修プログラムの策定、専門医認定・更新基準の構築などが急務であり、そのためには研修施設や指導医の確保と提供、教育研修会やワークショップを含む会員研修の充実、手外科専門領域の知識・技術の集積と発信など多くの課題に取り組んで行く必要があります。

この様な時期に、矢島弘嗣理事長のご高配により、田中克己、香月憲一両前理事より各々教育研修委員会と先天異常委員会を引継がせて頂きました事は、私自身大きな励みです。甚だ浅学且つ若輩の身ではございますが、諸先輩方のご指導を賜りつつ一層の研鑽に励み、また会員の皆様のご意向を尊重しつつ精進してまいる所存ですので、ご高配を賜りますれば幸いです。

.....

柴田 実

(国際委員会担当)

この4月に沖縄で開催された第57回日本手外科学会学術集会において代議員制度発足後、立候補制度による2回目の理事選挙が行われました。今回は多数の立候補があり代議員会では日本手外科に対する各候補者の様々な思いを込めた所信表明があり、2回の投票後に新理事メンバーが選出されました。

日本手外科専門医制度は三浪明男理事長の時代に準備作業が開始され、次の佐々木 孝理事長の時にはかなりの形が出来上がり、整形外科と形成外科の両基本科の二階に位置するsubspeciality専門医制度をめざして専門医制度認定機構に申請し、落合直之理事長の2年目、平成25年7月1日に47ある専門医制度の一つとして正式認定を受けました。その後、専門医制評価・認定機構の組織替えもあり、認定3年後となる平成28年6月30日の次回更新時にはかなりの新しい対応を迫られる予想であり、真の手外科専門医制度の確立にはまだ少し時間を要すると思われまます。

その間、形成関連の理事は手外科専門医構成基本診療科の一方としての形成外科から大幅に手外科学会入会者を増やし、たくさんの手外科専門医を育成することにより、手外科学会へ真の貢献をしなければならないとの思いを、また新たにしております。

新体制で私に指名された担当職務は前体制から引き続き、国際委員会です。

国際委員会は前体制からの委員会引き継ぎ重要事項として第6回日米手の外科合同ミーティングの企画があります。前回の第5回合同ミーティングは日本側の企画主催で準備が進められました

東日本大震災のため直前でやむなく中止となりました。今回第6回は米国側の主催で企画が進められ、学会の経理収支はASSHが責任を持って担当することになっています。

合同ミーティングASSH側の会長はWilliam H. Seitz先生が、JSSHは矢島 弘嗣 新理事長が会長で来年2015年3月29日～4月1日の会期でハワイ・マウイ島Hyatt Regency Maui Resort and Spaにおいて開催される予定になっております。合同ミーティングの主題はUnsolved problems in Hand Surgeryで、これを核に関連各種一般演題が募集される予定ですが、すでに未確定の部分を含んだプログラム骨子がウェブに掲載されています。学会合同企画の連絡についてASSHはJames Chan先生が、JSSHは落合理事長の時から国際委員会担当理事として私が担当させて頂いております。

この春の日手会新体制の発足に伴い、新国際委員会のメンバー、委員長決定後に、合同ミーティング・JSSHプログラム委員を決め、プログラムの調整・変更・確定を行う予定となっています。合同ミーティングのURLは<http://www.assh.org/Courses/ASSH-Courses/2015-ASSH-and-JSSH-Combined-Meeting>ですでお確かめ下さい。現在の掲示内容によれば学会レジストレーションは2014年8月14日(木)開始、宿泊予約は2014年2月27日締め切り(2015年の誤りと思います)となっておりますのでご予約に入れて頂けますようお願い申し上げます。

国際委員会メンバーは以下の様になりましたので宜しくお願い申し上げます。

担当理事	柴 田 実
アドバイザー	副 島 修
委員長	和 田 卓 郎
委 員	面 川 庄 平 光 嶋 勲 佐 藤 和 毅 鈴 木 修 身
	田 中 利 和 三 浦 俊 樹

.....

島 田 幸 造

(広報・渉外委員会、定款等検討委員会担当)

この度、伝統ある日本手外科学会の理事として選任いただき、大変光栄に思うと同時に、責任の重さに身の引き締まる思いであります。浅学非才の身ではありますが、先の代議員会における選挙の際に申しました通り、若輩だからこそできる仕事を率先して引き受け、学会のため、或いは手外科の発展のために寄与したいという思いで、与えられた任期を勤め上げたいと思っております。

私は、日本手外科学会には昭和63年に入会、また平成11年に評議員(現、代議員)を拝命して以来、広報渉外委員会、施設認定委員会、財務委員会、情報システム委員会等に参加して参りましたが、その中で、日本手外科学会の抱えるいくつかの問題も理解するに至りました。特にこの数年間は、専門医制度の見直しと確立のために揺れた激動の時代であったことは皆さまもご承知の通りです。幸いにも諸先輩方のご苦勞のお陰で新専門医制度導入へのロードマップも見えてきました。その過程で会員の皆が激論を交わし、より良い日本手外科学会の姿を構築してきたと確信しています。この誇るべき我が学会への貢献として、今期の理事会で小生が担当する広報渉外委員会では、限り

ある財源の中で情報をあまねく会員の皆さまにお伝えするだけでなく、皆さまの意見を学会運営に活かせるシステム構築を目指します。ホームページの充実、オンラインジャーナルなど編集委員会との連携、専門医制度も含めた会員情報管理システムとの連携など課題が山積していますが、引き続き力を注いでいきたいと思っております。また定款等検討委員会では、日本医学会に加盟し、新専門医制度にも認定された一般社団法人としての本学会が、それに相応しい、公正かつ公明な定款と内規を持つべく、その整備に尽力する所存です。

私は、昭和60年に大阪大学医学部を卒業し整形外科医局に入局、元々機能再建に興味を覚えていたことから阪大手外科グループのリーダーであった多田浩一先生に師事すべく香川医科大学整形外科に赴き、整形外科・手外科のみならず人生の多岐にわたる薫陶を受けました。香川赴任中の昭和63年から平成元年にかけてはドイツ・フンボルト大学 (Prof. Zippel) に交換留学生として派遣され、引き続いてスイス・ローザンヌのProf. Narakasやフランス・パリのProf. Gilbertの元で腕神経叢やマイクロ手術を中心に勉強させていただく機会に恵まれました。初めての海外生活でただひたすら臨床とその研鑽・研究に没頭できた貴重な期間であり、その後の小生の働く上での大切な糧となっています。帰国後は大阪大学、大阪厚生年金病院 (現JCHO大阪病院) を中心に関連病院において、手および肘関節外科の臨床研究に情熱を向けつつ後輩の指導をして参りました。これからは自院のみではなく本学会での活動を通じて一人でも有能な、より良い手外科医を育成するため、微力を尽くす所存です。今後とも皆様の、温かいご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

.....

坪川直人

(施設認定委員会、編集委員会、オンラインジャーナル別冊運用委員会担当)

沖縄で開催された定時総会で日本手外科学会理事に選出して頂いた新潟手の外科研究所の坪川直人です。大変光栄なことと身の引き締まる思いで、理事長を支え、代議員・会員の皆様とともに学会を支えていきたいと思っております。

私は昭和60年に新潟大学を卒業し、田島達也教授の整形外科教室に入局しました。その後手の外科研究班に入り、斎藤英彦先生、吉津孝衛先生、柴田実先生、牧裕先生に手外科のご指導をいただきました。新潟手の外科セミナー、手のリハビリテーション研修会を開催し、三浪明男先生、藤哲先生、金谷文則先生からも手外科を教えてくださいました。評議員、代議員を拝命してからは教育研修委員、用語委員を経験させていただき、教育及び教育する場の大切さを痛感しております。この度、矢島理事長から編集委員会、橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会、オンラインジャーナル別冊運用委員会の担当理事を仰せつかりました。編集委員会では、オンラインジャーナル化に伴い紙媒体による雑誌が廃止されたことで、多くの皆様方に御不便をおかけしました。今後より利用しやすいオンラインジャーナルを目指して正富委員長、牧アドバイザーに助けいただきながら務めてまいります。橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会では、2年前に作成した橈骨遠位端骨折診療ガイドラインの、5年に一度の改定を日本整形外科学会から要望されており、

改定には3年近い月日が必要なため予算の目途が立ち次第、本年度から準備に入る予定です。安部委員長、澤泉アドバイザーと密に連絡を取りながら進めてまいります。代議員の先生方には前回と同様に、論文の構造化抄録作成をお願いすることになります。ご多忙中誠に申し訳ありませんが、御協力くださいますよう宜しくお願いいたします。オンラインジャーナル別冊運用委員会は新しく立ち上がる委員会です。オンラインジャーナル別冊として、集約的に現在の手外科のトピックスや教育研修講演を取り上げ、別冊として発刊し、企業から広告費をいただき、今後の学会運営を支えていきたいと考えております。平田委員長に教えを乞いながら務めてまいります。その詳しい内容につきましては、投稿される先生方の御承諾を得ながら進めていきたいと思っております。

どの委員会もあまり経験したことのない部門でどれだけお力になるかわかりませんが、委員長及び委員の皆様とともに日本手外科学会がますます発展していくために努力していく所存であります。今後新しい一般社団法人日本専門医機構が立ち上がり、専門医制度も学会運営も転換期を迎えております。日本手外科学会が整形外科と形成外科の2つの学会を基盤とするサブスペシャリストとして、社会一般の方々および医療関係者に信頼される専門医を育成する学会とすべく、会員の皆様とともに目指していきたいと思っております。よろしくごお願いいたします。



仲 沢 弘 明

(学術研究プロジェクト委員会、専門医試験委員会担当)

この度、伝統ある日本手外科学会の理事に就任させていただき、誠にありがとうございます。これも皆様方のあたたかいご支援のお陰と感謝申し上げますとともに、これからの理事としての重責をひしひしと感じております。

私は、1983年に三重大学医学部を卒業後、東京女子医科大学形成外科に入局し、熱傷、マイクロサージャリーを含む再建外科、そして、手外科を主に担当してきました。2010年に現職となり、引き続き同様の診療と指導をしております。1989年第32回本学会において、私の師匠であります野崎 幹弘先生が「熱傷の手の治療」を講演されました。その時に同行させていただき、初めて本学会に参加し、多くの発表と講演を聞かせていただいたことがきっかけとなり手外科に興味を持ちました。1995年に本学会の会員になり今年で20年目となります。

私の特徴として3点述べさせていただきます。一つは熱傷における手の治療であります。広範囲熱傷に合併した手熱傷の治療は、熱傷患者の救命と手の機能の両面から治療しなければならず、また、手熱傷は単独でも特殊部位熱傷として扱われ、治療の適否により患者のQOLに大きく影響するため、専門的知識と技術が必要となります。近年、広範囲熱傷患者に対し、受傷早期の手術、いわゆる(超)早期手術が推奨されておりますが、手熱傷も早期手術の対象になりつつあります。二つ目は静脈皮弁です。1980年代に多くの発表が続きましたが、私もこの奇妙な皮弁に興味を持ち、arterialized venous flap (aVF) として手の軟部組織再建に用いてきました。初期の頃は、学会で発表するたびに厳しいご意見をいただきましたが、皮弁の血行形態を工夫することで生着率が向上す

ることを発表し、以後、これまでに100例以上のaVF症例を重ね良好な結果を得てきました。三つ目は、再生医療です。現在、日本大学において、脱分化脂肪細胞 (DEFAT) を用いた神経再生や皮膚再生における細胞治療の研究を行っております。今後、手外科においても再生医療を導入した新しい治療法を発表したいと考えております。

今後の抱負としまして、日本形成外科学会の理事の一人として、一人でも多くの若手形成外科医が本学会の会員となるよう働きかけ、彼らが、手外科を研鑽し、専門医を取得し、社会に貢献できるよう指導に鋭意努力いたします。また、整形外科と形成外科の良好な関係を築くべく、両者のコミュニケーションを図り、また、両者がお互いの特徴を生かした、分け隔てない環境作りに努力します。

浅学非才の身ですが、本学会の発展に微力ではありますが、粉骨砕身努力する所存です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

.....

渡 邊 健太郎

(倫理利益相反委員会、用語委員会理事)

この度、2期目の理事に選出していただきました。代議員の皆様にご心より感謝申し上げます。この2年間、落合前理事長のもとで今本学会が抱えている問題と今後の方針について多くを勉強させていただきました。私個人は社会保険等委員会担当理事を任せられ私なりに努力いたしましたが、果たして十分な貢献ができたとは申せません。引き続き理事に選ばれたことはもっと頑張れという皆様の叱咤激励であると理解しております。

昨年、本学会は日本整形外科学会と日本形成外科学会の両基盤学会に立つsubspecialtyとして社団法人日本専門医制評価・認定機構により3年間という期限で認定され、今年5月に発足した一般社団法人日本専門医機構においても引き続き認定される見込みです。3年後も継続して認定されるためには、これまで通り両基盤学会に立つ姿勢をくずすことなく、その専門性を向上させていかなければなりません。また2021年(早まる可能性があります)から新しい基準によるsubspecialty領域での専門医認定が始まります。したがって専門研修プログラムの作成が早急の課題であり、症例データベースの構築も考慮していく必要があります、喫緊の課題が山積しております。本学会は決して大所帯とは言えませんが、多くの委員の皆様の献身的な活動で支えられております。この活動を継続していただけるようにサポートすることが理事の大きな仕事でもあります。非力ながらも努力してまいりますので、皆様のご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

名誉・特別会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に就任して



川崎市病院事業管理者 堀内 行雄

昨年、兵庫で行われました第56回日本手外科学会集会以で名誉会員にご推挙戴きありがとうございました。私はこれまで多くの臨床も行って参りましたが、特に手外科を専門として臨床並びに研究に従事してきましたので、伝統ある本学会の名誉会員に就任させて頂いたことは、身に余る光栄に存じます。

慶應義塾大学医学部を昭和48年卒業後、慶大整形外科教室に入室しました。早くから手外科に興味を持ち、4年目から手外科班に加えていただき、内西兼一郎先生、伊藤恵康先生をはじめ多くの先生方にご指導戴きました。実験的研究は雑種成犬坐骨神経を自家考案のスプリング式圧迫装置で圧迫することで末梢神経圧迫障害モデルを作製するもので同級の坪山寿郎君と一緒に研究を進め、「末梢神経圧迫障害に関する実験的研究」で学位を取りました。当時は、毎週木曜日夕方には慶大でカンファレンスに参加し、実験は土日に行っていました。手外科班の同級にはもう一人、前日手会理事長の佐々木 孝君がいます。

矢部裕名誉教授は、昭和61年8月に藤田保健衛生大学整形外科教授から慶大整形外科教授に就任されました。その時から、先生の症例に対する考え方や手術方法などの指導を受けました。当時は矢部教授、内西助教授、伊藤専任講師の下にいましたので、いろいろな症例がたくさん集まり、多くの臨床例の勉強が出来ました。

本学会への貢献は、昭和60年頃から広報委員会（現広報・渉外員会）、定款等検討委員会、法人化委員会、専門医施設認定委員会などの委員や委員長、理事をさせていただきました。評議員には、慶大は同門が多いという理由でなかなかさせて頂けなかったのを覚えています。平成17年から理事を務め、平成21年4月16日と17日の2日間、新宿京王プラザホテルで第52回日本手外科学会学術集会を開催させて頂きました。慶大整形外科の日手会学術集会開催は4回目であり、第33回会長を務められた矢部裕名誉教授から「慶應らしい学術集会を開催するように」との命題をいただきました。池上博泰君、中村俊康君、佐藤和毅君を中心に、慶大整形外科上肢班の全員の協力のもと十分に準備して学術集会を迎え、1733名の参加者があり、成功裡に終えることが出来ました。これは、会員の皆様のご協力の賜物と深謝いたしております。また、スムーズな会の運営には、慶大上肢班の並々ならぬ協力があつたからこそであると感謝しています。従って、今回の名誉会員の称号も慶大上肢班に与えられたものと考えております。

日手会は一般社団法人になり、念願の日本医学会に加盟し、subspecialtyの学会として認められています。日本専門医機構が立ち上がり、これからその準備に大変ですが、今後も整形外科と

形成外科が協力して、さらに大きな先進的な学会に成長することを願っています。私もそれを少しでも支援できればと思っています。この度はありがとうございました。



日本手外科学会特別会員に就任して

岡 義 範



昨年の第56回日本手外科学会におきまして、伝統ある本学会の特別会員に就任させて頂き誠に光栄に存じております。

1971年に慶應義塾大学卒業後直ちに整形外科学教室に入局しました。当時[手の外科]を主催しておられたのは矢部裕講師(当時)で、私はフレッシュマンとして何度か手術助手の末席に加えていただきました。特に屈筋腱損傷の修復手術では適応や手技に関する会話がチンプンカンプンで、しばしばお眠りの状態に陥った事が思い出されます。手の外科に興味を持ち始めたのは整形外科医4年目の事でした。その前の関連病院出張時、様々な症例・手術を経験する中で、腱の手術はオープンも経験不足で手が出せず、この分野は大変な領域だと感じた事でした。大学に戻った4年目時、専門分野の選択では迷わず手の外科を志望しました。この時期、矢部裕先生は名古屋保健衛生大学教授として赴任された後で、内西兼一郎講師(当時)を先頭に、伊藤恵康先生らが臨床・研究を行っておられ、私には「末梢神経再生に関する実験研究」のテーマが与えられました。同僚と組んで、臨床の終わった夕方から夜遅くまで張り切って実験に取り組んだ事を懐かしく思い出します。この実験にはマイクロ技術を要したので研究終了時には顕微鏡下手術が出来るようになっており幸いな事でした。

1988年にはLos AngelesのJoseph Boyes手の外科研究所に留学の機会を得ました。Prof Stark, Prof Ashworthの下で手の外科clinical fellowとして多彩な臨床例を教わる事が出来ました。Dr Boyesは既に引退されていたものの時に顔を出され、諸々の話を聞くことが出来たのは大きな喜びでありました。LAでの研修の後、NY, Columbia大学のProf Carroll, MNのMayo Clinicでは主にDr Linscheidに各々1か月余研修する機会を得た事も以後の手外科医人生に影響を与えられた事でした。

帰国後直ちに新設6年目の東海大学に赴任しました。当時は今井望教授以下総勢8名の少数医局で、弱冠10年生の私に手肘の外科全てが任せられ、実に多くの症例を経験でき、更に週一度は自身で末梢神経再生の実験も行い、結果多くの学会に発表出来た事は幸運な事でした。

助教授昇進後も自分の臨床・研究に邁進することが出来ましたが、2004年の教授昇進後は附属病院の副院長や病院長に指名され、管理分野での仕事が多くなり、自身の臨床例は減ってきたものの後輩の指導・育成に携わる事が喜びとなりました。

日本手外科学会では1981年から評議員にして頂き、用語委員会には計12年間携わり、改訂第3

版用語集を委員長として発刊出来たのは思い出深い事です。評議員会では2年連続で議長に指名され議事を采配出来たのも今は懐かしい思い出となりました。2010年に監事に任命され、この事が今回の特別会員就任に至ったものと思っています。

現在は内科医の妻が営むおかクリニックと東京天使病院で半々の勤務をしています。整形全般の臨床医といったところですが、他医からの紹介患者やインターネットを見て来院した手外科患者の診療を楽しみにしつつ医師人生を送っています。今後は、日手会を客観的に見つつ、その発展を見守りたいと思います。この度は有難うございました。



日本手外科学会特別会員に就任して

おくつ整形外科クリニック 奥津 一郎



昨年の第56回学術集会で日本手外科学会特別会員を拝受したので、この場を借りて御挨拶させていただきます。

私は1972年(昭和47年)に日本医大を卒業後、東大整形外科に入局、73年には奈良県立医大の玉井進先生のご指導の基にMicrosurgeryを学び、同年第16回日本手の外科学会学術集會に初めて参加、会員ならびに評議員の先生方の切磋琢磨する関係に感銘を受け、「手の外科学会評議員を目標」に、努力したいと考えました。その後、微小外科手技を応用した機能再建を中心に研学を進め、第26回学術集會で評議員に推挙頂きました。この過程で、整形外科対象疾患の手術は最小の健常組織損傷で目的を達成する必要があると考えられるようになりました。その手段として内視鏡が考えられましたが、当時「関節外」を鏡視可能な内視鏡は存在しませんでした。そこで媒体としての透明な閉鎖性内視鏡用外套管と一般的な関節鏡を組み合わせたUniversal Subcutaneous Endoscope (USE) systemを考案し、1986年に関節外鏡視手術の第一の臨床応用として手根管症候群の内視鏡手術を開発・施行しました。その後、本術式が手根管・正中神経を安全に除圧可能な根拠のある手術である事を証明しました。

近年、低侵襲手術を目的とした様々な術式・器械が報告されていますが、新技術を開発した経験から私自身が感じるのは、新手術を具現化するには、従来から行われている標準的術法が生まれた歴史・背景・概念も熟知することが必要です。そうすれば標準的術法の欠点を克服した新しい手術を独創性を持って開発することが可能となります。十分な考察の結果生み出されたオリジナルの術法は、簡単な思いつきで術式を変えてもメリットが生じる余地はないと思います。「何々変法」や企業主導で開発された器械の治療経験云々の報告だけでなく、十分に考察された独創性にあふれた発表が、日手会で話し合われることを期待します。

数年前には、このような実力をを持った手の外科医を生み出し育てることを理想として、手の外科専門医研修施設認定にも関わりました。しかし、近年の専門医制度や学会法人化の迷走で、私の考

える「手の外科専門医」像とはギャップを感じるようになりました。過日、透析患者さんから「手の外科認定施設において手根管症候群のシャント側手術を断られた」と直接お聞きしました。会員から認められる総合的な実力を持っていた「手の外科学会評議員」が、組織改変により「代議員」制度に変わった点にも一抹の不安を覚えます。多くの先達が「手の外科」学会と命名し共に学んできた名称を、「手外科」学会に改称してまで、「広告のできる専門医」制度に迎合することは本当に必要なのか、一体誰のためなのか懸念を抱きます。

思えば42年間手の外科診療に携わってきました。現在無床クリニックで、手の外科領域の様々な疾患の外来日帰り手術を行っています。我々医師は、とにかく「患者さんに満足してもらえる診療・治療を行うこと」に注力すべきです。そうすれば患者さんの信頼を得、別の患者さんの治療機会が生まれます。「手外科専門医」である若い先生方は、その名称だけに満足することなく、「手の外科医」として、患者さんに満足してもらえるように研鑽に励んでいただきたいと願っております。



日本手外科学会特別会員に就任して

立花 新太郎



伝統ある日本手外科学会特別会員にご推挙頂き、身に余る光栄です。今年、伊勢神宮式年遷宮の翌年にあたり、おかげ年と呼ばれ江戸時代には多くの参拝者がおかげまいりをしたそうです。おかげ様の気持ちをこめて、私の来し方をふりかえって一文と致します。

私は、昭和23年1月9日生れ、いわゆる団塊の世代の一員です。東大紛争をノンポリとして傍観し、昭和48年3月卒業、津山直一教授の主宰されていた整形外科学教室に入局しました。卒後3年目くらいから、津山先生のもと、原 徹也、伊地知正光、長野 昭の諸先生が運営されていた末梢神経診療グループに参加させて頂きました。当時の主な対象はポリオの遺残麻痺に対する機能再建術、腕神経叢損傷、分娩マヒなどでした。麻痺性尖足に対するLambrinudi法などは、もはや古典芸能のようで、貴重な経験をさせて頂きました。津山先生の研究テーマであられた筋電図検査についてもきたえられました。頂度、加算器つきの誘発電位測定装置が実用化し、記録が困難であった障害神経の感覚神経活動電位が記録可能となり、絞扼神経障害の診断が飛躍的に発展した時期でした。当時、長野先生の号令のもと東大末梢神経診の症例のレビューが行われることになり、私の分担は、尺骨神経麻痺でした。諸先輩の症例の予後調査を行い、肘部管症候群の手術成績、尺骨神経管症候群を日手会で報告させて頂きました。

大学勤務中に絞扼神経障害の動物モデルを作る実験に着手しましたが結果が出ず、医局の研究費を無駄使いすることになりました。学生生活をあきらめ、昭和57年に虎の門病院に就職致しましたが、傷心の私に津山先生から「継続は力なり」というお言葉を頂き、毎年、日手会に発表することを自らのノルマとしました。虎の門病院では慢性腎不全に対する透析療法が早くから導入されており、

導入後20年という患者さんを診療することができました。それまでuremic neuropathyとされていた、透析患者さんの手のシビレが β_2 ミクログロブリン由来のアミロイド沈着に起因する手根管症候群であることが下条先生らにより報告され、自験例の症例報告を致しました。頂度、日手会誌創刊の年にあたり、第一号に論文を掲載させて頂きました。それ以降、主に手根管症候群に関する演題を発表させて頂きました。昭和62年に日手会評議委員に任ぜられ、虎の門病院にレジデントとして就職した中道 健一、喜多嶋 出の両名を日手会専門医に育てることができました。平成3年からは、社会保険等委員会委員に任ぜられ、中村 純次、原 徹也 両アドバイザーの薫陶を受け、それまで関心の薄かった保険診療について学ばせて頂きました。平成8年から平成12年まで中村 純次先生が始められた学術集会時の「手の外科における保険診療」セミナーを引きついで担当させて頂きました。今、院長職を務めていらっしゃるのはこの時学んだ素養のおかげです。

以上、お名前をあげさせて頂いた方々を含め、多くの諸先輩、同世代のライバル、後輩の諸先生のおかげで、ここまでやってこられました。本当に有難うございました。

物故会員への追悼文

田村 清 先生を偲ぶ

京都大学医療技術短期大学部 上羽 康夫



平成25年6月21日に田村清先生の訃報を知った時、私の心は良き友を失った悲しみに打ち拉がれた。

昭和29年(1954)4月に京都大学医学部医学進学課程に入学し、初めて田村 清君と出会い、其後6年間の学生生活を同級生として共に過ごした。彼は京都府立洛北高校卒の英才であり、医学部軟式テニス部で活躍したスポーツマンでもあった。昭和35年医学部を卒業し、インターンの1年間は別々であったものの翌年4月には所謂S.35グループ14人組の仲間として京大整形外科に入局し、再び一緒になり、田村君は大学院生となった。その頃は近藤 鋭矢教授退官が真近な時期であり、本格的な研究を彼が始めたのは昭和38年末に伊藤 鐵夫教授が着任されてからであった。彼が取り組んだ研究は末梢神経内のfunicular patternであった。手根部から肩関節に至るまでの正中-、尺骨-、橈骨-神経の切片標本を何万枚も作り、染色し、顕微鏡で1枚ずつ観察し、funicular patternを記録して神経束の走行を確かめ、論文に纏めた。正に、彼の非凡なる集中力と忍耐力の結晶であった。当時の最先端の研究であり、現在の神経外科・マイクロサージャリーの基礎を築いたのである。研究が一段落した昭和41年に京都国立病院に短期赴任したが、間もなくカナダのSaskatchewan大学に2年間留学し、そこで小児ペルテス病のA-cast治療法を習得して帰国した。昭和46年神戸中央市民病院へ赴任し、其後30数年間の長きに亘り勤務し、病院を発展させた。初代整形外科部長：笠井 実人先生の後を継いだ田村 清部長は一般整形外科、小児整形外科、手外科・マイクロサージャリーを実践し、毎年1,400～1,800例の手術を行い、数多くの患者を救済した。昭和54年「近畿手の外科症例検討会」設立時、手外科に造詣の深い彼は創始者12名の中の一人であった。昭和60年には日本手の外科学会評議員に選ばれ、プログラム委員会、末梢神経委員会、社会保険等委員会等の委員を歴任し、平成13年に特別会員とられた。また、「末梢神経を語る会」幹事も長年務められた。

田村 清先生の話し方は誠実な人柄が表れ、説得力があり、聞く人を安心させ、納得させた。教育熱心な彼は日常の外来診察や手術を通して整形外科の知識と技術を伝えたばかりでなく、神戸オープンボーンカンファレンスを主宰して自由闊達な討論を促し、平成3年には第30回日本小児股関節研究会を開催して若き整形外科医に学問への意欲と興味を持たせた。彼の門下生から数多くの

優れた整形外科医達、例えば浜西 千秋教授 (近畿大)、飯田 寛和教授 (関西医大)、中村 孝志教授 (京大) などが輩出したのはその証であろう。晩年に病を得た彼は神戸中央市民病院を退職して神戸市医師会看護専門学校長として勤務し、神戸市の医療発展に最後まで尽くされたのである。

田村 清先生の偉大な業績を偲び、ご冥福を心よりお祈りしつつ、この稿を終える。合掌

James B. Steichen 先生を偲んで

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

Dr. James B. Steichenが5月22日に亡くなったとの訃報が、彼の柔和な笑顔の写真とともにASSHニュースで届いたのは、神戸での第87回日整会の翌週、平成26年5月31日(土)であった。

思い起こせば、彼が奥様のJoanと一緒に広島に到着したのは、今から丁度40年前の1974年11月11日であった。この年は、5月11日から19日までの9日間、東京、新潟、広島、京都の4会場で、初めての「日米手の外科合同会議」が開催された記念すべき年で、この会議にインディアナポリスから参加されたDr. James Stricklandが津下先生に、同僚のDr. Steichenを広島で研修させたいとの依頼があり、私にもよろしくとの挨拶があり、その半年後の来日であった。

Jimは、1941年9月23日にミズーリー州のセント・ジョセフで生まれたが、スタンダード石油会社に勤めておられたお父さんの転勤に伴い、幼少期をいくつもの町で過ごしたが、最終的にはイリノイ大学の医学部を卒業した。1968年(27歳)インディアナ大学に移り、その後セント・ビンセント病院で整形外科医として勤務することになり、ここで後に奥さんとなるJoanと出会った。1972年から1974年秋までオクラホマ州の陸軍病院に勤務した後インディアナ州に戻り、Joanとサン・ルカ教会で結婚式を挙げ、新婚旅行に旅立った。この新婚旅行の訪問先が当時の世界のMicrosurgeryのセンター的な施設であったオーストラリア・メルボルン(Dr. B. O'Brien)、広島(津下 健哉先生)、カリフォルニア・サンフランシスコ(Dr. Harry Buncke)であった。前年の1973年にラスベガスで開催された第28回アメリカ手の外科学会でFounders Lectureをされた津下先生は、当時のアメリカで最も有名な日本のHand Surgeonであったはずである。

広島に到着したJim & Joanは、廣大附属病院から徒歩10分あまりの比治山という街中の小さな丘の上にあるABCC(原爆障害調査委員会)のゲストハウスに滞在し、私どもの病院や関連する病院での手術などを4ヶ月間にわたり見学した。日米手の外科合同会議の記録から緋くと、1974年1月の時点での私自身の切断指再接着の症例数は、完全切断3手37指に挑戦し、3手22指に成功した頃で、当時再接着の実績はほとんど無かったアメリカではとても経験出来ない症例に彼は遭遇していた事になる。すなわちJimが広島に滞在している頃は日本ではMicrosurgeryの臨床応用が始まったばかりの時代であり、非常に濃密な臨床の時間を共に過ごすとともに、我が家での鍋料理を囲んでの和やかな時間など、個人的な楽しいお付き合いの時も持つ事が出来た。フランス系のJoanは、鍋物の材料にと用意した広島の牡蠣を、是非にと、ナマで美味しそうに口に運んでいたのを昨日の事のように思い出す。

1975年2月にサンフランシスコで開催された第30回アメリカ手の外科学会に、田島 達也、山内 裕雄、室田 景久、上羽 康夫の各先生と共に招待された私は、学会終了後JimとJoanがDr. Harry Bunckeのところでの研修のために滞在している部屋に宿泊させていただき、広島でのお付き合いの延長を楽しんだ。写真は、当時の3月の、とある日のDr. Buncke宅での懇親会。右下にBuncke先

生のサインと、左下にJimのペンによる添え書きで、March 1975, with many memories of my good friend Yoshi Ikuta – at Harry Buncke’s house in San Francisco. Jim Steichenとある。

Jimはインディアナポリスにて整形外科の臨床正教授として多くの病院や診療所で職員として、あるいはボランティアとして勤務し、1991年から1997年まではセント・ビンセント病院手の外科主任として勤務。アメリカ中西部では初めてのToe-to-hand transferの手術を行い、1998年には、Distinguished Physician Awardに輝いている。また、インディアナ・ハンド・センターをDr. Stricklandらと共に設立し、American Society for Reconstructive MicrosurgeryやInternational Society of Reconstructive Microsurgeryの会長、アメリカ手の外科学会の理事、汎太平洋外科学会の副会長など要職を歴任した。

彼の温和で社交性に富んだ人柄は、中途半端でなく、物事にこだわり、音楽や芸術品の美しさを愛する性格と相まってインディアナ医学博物館の理事長、インディアナポリス芸術博物館の理事、インディアナポリス交響楽団やアメリカピアニスト協会の理事長などを長年勤めた。

葬儀はJoanとの結婚式を挙げたサン・ルカ教会で、奥様のJoanと二人の子供BrookeとJimboにより5月28日に執り行われた。享年72歳。衷心よりご冥福をお祈り致します。(2014.6.9)

写真1：1975年サンフランシスコにて(本文参照)。

写真2：1995年Steichen夫妻とともに、大阪にて。

写真3：2004年のクリスマスカード。From the east winds in St. Thomas and the “Fours Winds” in Indianapolisとある。因みにSteichen一家の家(建物・屋敷)は”Four Winds”と名付けられている。



写真1：サンフランシスコ、Dr. H. J. Buncke先生宅にて。(1975年)



写真2：大阪にて、Dr. Jim & Joan Steichenと。（1995年）



写真3：Steichen一家からのクリスマスカード。左からJim、Jimbo、Joan、Brook（2004年）

平成26年度 各種委員会委員

●常設委員会

財務委員会

担当理事 三 上 容 司
アドバイザー 川 端 秀 彦 小 川 正 則
委員長 大 江 隆 史
委員 内 山 茂 晴 清 川 兼 輔 楠 瀬 浩 一 田 尻 康 人
西 脇 正 夫

教育研修委員会

担当理事 柏 克 彦
アドバイザー 青 木 光 広
委員長 服 部 泰 典
委員 射 場 浩 介 大 井 宏 之 小 島 康 宣 澤 泉 卓 哉
建 部 将 広 田 中 克 己 鳥 谷 部 莊 八

編集委員会

担当理事 坪 川 直 人
アドバイザー 牧 裕 隆
委員長 正 富 隆
委員 石 垣 大 介 大 江 隆 史 笠 井 時 雄 五 谷 寛 之
鳥 谷 部 莊 八 中 道 健 一 南 野 光 彦 野 口 政 隆
信 田 進 吾 長 谷 川 健 二 郎 原 友 紀 日 高 康 博
平 地 一 彦 藤 原 浩 芳 村 田 景 一 山 下 優 嗣
山 中 一 良 横 井 達 夫 若 林 良 明

機能評価委員会

担当理事 稲 垣 克 記
委員長 中 村 俊 康
委員 長 田 龍 介 織 田 崇 佐 藤 彰 博 長 谷 川 健 二 郎
山 下 優 嗣

国際委員会

担当理事 柴 田 実
アドバイザー 副 島 修
委員長 和 田 卓 郎
委員 面 川 庄 平 光 嶋 勲 佐 藤 和 毅 鈴 木 修 身
田 中 利 和 三 浦 俊 樹

広報・渉外委員会

担当理事 島 田 幸 造
アドバイザー 勝 見 泰 和
委員長 西 浦 康 正
委員 麻 田 義 之 垣 淵 正 男 草 野 望 千 馬 誠 悦
日 高 典 昭

社会保険等委員会

担当理事 池 上 博 泰
アドバイザー 高 瀬 勝 己 牧 野 正 晴
委員長 吉 川 泰 弘
委員 稲 田 有 史 清 重 佳 郎 坂 野 裕 昭 代 田 雅 彦
戸 部 正 博 根 本 充 平 瀬 雄 一

先天異常委員会

担当理事 柏 克 彦
アドバイザー 堀 井 恵 美 子
委員長 射 場 浩 介
委員 石 垣 大 介 黒 川 正 人 沢 辺 一 馬 鳥 谷 部 莊 八
中 島 祐 子

倫理利益相反委員会

担当理事 渡 邊 健 太 郎
アドバイザー 塚 田 敬 義 砂 川 融
委員長 根 本 充
外部委員 深 谷 和 子 山 我 美 佳
委員 重 富 充 則 普 天 間 朝 上 湯 川 昌 広

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 仲 沢 弘 明
委員長 磯 貝 典 孝
委員 内 田 満 小 野 浩 史 亀 井 讓 長 岡 正 宏
中 土 幸 男

専門医制度委員会

担当理事 稲 垣 克 記
アドバイザー 土 井 一 輝
委員長 田 中 克 己
委員 岩 崎 倫 政 亀 井 讓 柴 田 実 鈴木 茂 彦
砂 川 融 牧 裕 三 上 容 司 矢 島 弘 嗣

専門医資格認定委員会

担当理事 鈴木 茂 彦
委員長 中 道 健 一
委員 大 泉 尚 美 大 谷 和 裕 鳥 山 和 宏 中 尾 悦 宏
村 松 慶 一

施設認定委員会

担当理事 坪川直人
委員長 石川浩三
委員 尼子雅敏 江尻莊一 坂井健介 島田賢一
藤尾圭司

専門医試験委員会

担当理事 仲沢弘明
アドバイザー 清水弘之
委員長 鈴木克侍
委員 新井健 有野浩司 池田全良 加藤博之
國吉一樹 有酒井昭典 池田全良 加藤博之
長谷川健二郎 福本恵三 佐野和史 武石明精

カリキュラム委員会

担当理事 岩崎倫政
アドバイザー 松下和彦
委員長 長田伝重
委員 内田満夫 柿木良介 沢辺一馬 松村一
森友寿夫

情報システム委員会

担当理事 池上博泰
委員 稲垣克彦 岩崎倫政 落合直之 垣淵正男
柏木茂彦 岩崎倫政 柴田直実 島田幸造
鈴木彦彦 坪川直人 仲沢弘明 西浦康正
三上容司 矢島弘嗣 渡邊健太郎

●特別(臨時)委員会

用語委員会

担当理事 渡邊健太郎
委員長 田中英城
委員 浦部忠久 後藤涉 根本充 牧信哉

Web登録委員会

担当理事 三上容司
アドバイザー 佐々木孝
委員長 牧野正晴
外部委員 光岡和彦
委員 亀山真剛 橋詰博行 田尻康人 村上隆一
村瀬剛

定款等検討委員会

担当理事 島田幸造
委員 木森研治 鈴木茂彦 平田仁 藤岡宏幸

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会

担当理事 矢島 弘 嗣
アドバイザー 金谷 文 則 澤 泉 卓 哉
委員長 安部 幸 雄
委員 泉山 公 今谷 潤 也 金城 養 典 児玉 成 人
長尾 聡 哉 仲西 康 顕 藤原 浩 芳 三浦 俊 樹
森谷 浩 治 門馬 秀 介

オンラインジャーナル別冊運用委員会

担当理事 坪川 直 人
委員長 平田 仁
委員 岩崎 倫 政 酒井 昭 典 牧 裕

監事紹介

内 田 満 長 岡 正 宏



前列左より、長岡監事、内田監事、三上副理事長、矢島理事長、鈴木副理事長、落合前理事長
後列左より、稲垣理事、柴田理事、坪川理事、池上理事、根本58回会長、金谷57回会長、仲沢理事、水関59回会長、
柏理事、島田理事、岩崎理事、渡邊理事

教育研修会のお知らせ

◆第20回秋期教育研修会◆

会 期：平成26年8月30日(土)～31日(日)
会 場：大阪府 ナレッジキャピタルコングレコンベンションセンター
主 管：日本手外科学会教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆第2回カダバーワークショップ◆

日 時：平成26年9月20日(土)～21日(日)
会 場：札幌医科大学北1講義室、解剖実習室
主 催：札幌医科大学整形外科学教室
協 力：一般社団法人日本手外科学会

関連学会・研究会のお知らせ

◆第25回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成26年8月29日(金)～30日(土)
会 場：ホテル ルビノ京都堀川
会 長：中川 正法(京都府立医科大学大学院 医学研究科 教授)
詳 細：<http://jpns25.umin.jp/index.html>

.....

◆第29回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成26年10月9日(木)～10日(金)
会 場：城山観光ホテル
会 長：小宮 節郎(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科整形外科学 教授)
詳 細：<http://kiso2014.umin.jp/>

.....

◆第23回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成26年10月9日(木)～10日(金)
会 場：松本文化会館
会 長：松尾 清(信州大学医学部形成再建外科学講座 教授)
詳 細：<http://jsprs23.umin.jp>

.....

◆第25回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：平成26年11月27日(木)～28日(金)
会 場：ヒルトン東京ベイ(千葉県浦安市舞浜)
会 長：亀ヶ谷 真琴(千葉こどもとおとなの整形外科 院長)
詳 細：<http://web.apollon.nta.co.jp/jpoa2014/>

.....

◆第41回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：平成26年12月4日(金)～5日(土)
会 場：京都府民総合交流プラザ京都テルサ
会 長：柿木 良介(京都大学大学院医学研究科整形外科 准教授)
詳 細：<http://www.acplan.jp/jsrm41/index.html>

.....

◆第27回日本肘関節学会◆

会 期：平成27年2月13日(金)～14日(土)
会 場：沖縄コンベンションセンター
会 長：金谷 文則(琉球大学医学部 整形外科学 教授)

.....

◆第58回日本形成外科学会学術集会◆

会 期：平成27年4月8日(水)～10日(金)
会 場：ウェスティン都ホテル京都
会 長：鈴木 茂彦(京都大学大学院医学研究科・医学部形成外科学 教授)

.....

◆第29回日本医学会総会 2015関西◆

会 期：平成27年4月11日(土)～13日(月)
会 場：国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都、京都大学百周年時計台記念館、
京都大学医学部芝蘭会館
会 頭：井村 裕夫(京都大学名誉教授・元京都大学総長)
詳 細：<http://isoukai2015.jp/>

.....

◆第88回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成27年5月21日(木)～24日(日)
会 場：神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場
会 長：吉川 秀樹(大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学整形外科教授)
詳 細：<http://www.joa2015.jp/>

編集後記

昨年にも増して酷暑の日々の中、国内、世界情勢にも不安定な動きが止まらない状況が続いています。当学会におきましても、本年の総会で、史上初めての選挙による理事選出が行われました。会員の中にも様々な意見があるとは思いますが、手外科および当学会の発展を願う思いに、何ら相違はありません。本号において掲載いたしました、新理事長、副理事、理事の先生方の抱負にも、手外科発展にかける意欲が表れておりますので御一読願えれば幸いです。また、落合前理事長には任期中の一方ならぬ御苦勞に対し、そして昨年度、名誉会員・特別会員となられました先生方には長年の御貢献に対し、心より感謝申し上げます。

当委員会も、勝見泰和アドバイザー、島田幸造担当理事、西浦康正委員長の下、委員として日高典昭先生を迎え、新体制としてスタートいたします。今後も、会内外への情報発信、ホームページの充実等に努力して行く所存でございますので、よろしく御願い申し上げます。

(文責：麻田義之)

広報・渉外委員会

(担当理事：島田幸造，アドバイザー：勝見泰和，

委員：麻田義之，垣淵正男，草野 望，千馬誠悦，西浦康正，日高典昭)